2017年7月15日

鼎談

パネラー：武末　純一
亀田　修一
土生田純之
司会：高久　健二

高久：時間となりましたので、最後に、今日ご講演されました３人の先生方の鼎談を始めさせていただきたいと思います。

通常は討論形式になるのですが、せっかく渡来人研究のビッグスリーをご招待いたしましたので、是非、鼎談というかたちで進めさせていただきたいと思います。

では、早速、鼎談に入っていきたいと思います。

今日のご講演は弥生時代から古墳時代、さらに一部は奈良時代までと、非常に長期間にわたる渡来人の動向がテーマになっていたと思います。ですから鼎談におきましても、時期ごとに区切りまして進めていただきたいと思います。

大きくは３つの時期があると思います。まずは弥生時代から古墳時代前期です。こちらは武末先生が中心になるかと思います。その次が５世紀、いわゆる古墳時代中期の渡来人、そして最後は６世紀、古墳時代後期の渡来人です。この３つの時期に分けて鼎談を進めていただきたいと思います。

それでは最初に弥生時代から古墳時代前期ということで、武末先生のほうから口火を切っていただければ思います。

武末：今日、私は東日本については何も述べていません。私は、それぞれの地域が中心であるという平等主義者ですので、いいがかりをつけられては困ります。

まず弥生時代の終わりから古墳時代の始めで文字の使用を申し上げましたが、朝鮮半島と北部九州、さらに北部九州から近畿につながるルート、つまり北部九州を介した交易だけではなく、平面・断面ともに梯形の鋳造鉄斧の分析では、山陰地域と朝鮮半島との直接的な交易も考えています。

土生田先生は東日本のほうでもそういう独自の交易があると書かれているので、それをご説明いただきたいと思います。ただし、その場合、私が申し上げた、例えば山陰地域、それは近江や若狭あたりまで含みますが、そういうところと朝鮮半島のダイレクトな交易の余波なのか、それとも東日本は東日本でもう１つ別の交易ルートを持っていたのか、これについて是非とも土生田先生のご高説をおうかがいしたいです。これが１つです。

それからもう１つは、西新町遺跡を取り上げましたが、この中で近畿から岡山までつながるような王権同士の交易を提起しましたが、この４世紀の段階で、それとは違う交易が東日本のほうにあるのでしょうか。もしそれが考えられるのならば、これも是非ご教示ください。

土生田：私が武末先生に九州中心に話してくださいといったのは、論点を明確にするためでした。先ほどいいましたように、これまでは九州・瀬戸内を通って畿内というところばかり重視されておりました。もちろんそれが大きな波であることは否定できませんし、これは圧倒的に多いわけです。しかし、そうではないものもあるということには留意しておく必要があるだろうと思います。

そこで、私の資料の９～11ページあたりになりますが、まず９ページをご覧ください。これは銅釧ですが、釧というのは腕に巻くものです。もちろん西日本にも出ておりますが、断面が少し違いまして、系譜が違うものです。のちの時代になりますと、大きいものを断ち割って、小さく丸めて加工するものです。これは長野や群馬、山梨、静岡などにありまして、西から来た物ではなく独自の交渉ルートで、もたらされたものであることを示しています。

次ページの第２図でございますが、これは長野県木島平村（根塚遺跡）という北信のもので、弥生の末期ぐらいだと思います。この柄のところが渦巻きになっております。同時に韓国金海良洞里という遺跡のものを挙げておりますが、これは先ほどからありましたのちの金官伽耶国の地域のものであります。そこと九州は大いに交流していますが、それとはまた別の交流もあったであろうと考えることができます。

もう１つは第３図で、先ほど亀田先生のところで馬形帯鉤というものが出ていたと思いますが、これも長野（浅川端遺跡）から出ております。これは同じ流れかどうかわかりませんが、東日本にも数は少ないとはいえ、こういったものが出ております。そのほかに、私がおります相模国からも棒状の鉄斧も出ておりますし、多鈕細文鏡というものも長野からも出ております。また、まだ報告されておりませんが鉄斧も出ておりますので、東日本も丹念に探すといくつかあります。

その流入口はどこかといいますと、西から来るものもあるかもしれませんが、先ほどいいましたように、形態が違うものもございますので、それを考えますと北陸以外にはありません。ただ、問題は、素通りしたのかどうかわかりませんが、北陸にそういうものを示すものがありません。

北陸も６世紀半ば以降になってきますと高句麗がいよいよ危なくなってきまして、新羅との関係で新羅を飛ばして倭国との交流を密にするということで直接使者を送ってきたりするのですが、北陸についてはそれ以前のことはまだわかりません。福井県では大加耶系の金銅冠（石船山古墳出土）が、そして富山県などでは冠帽の飾り板（桜谷古墳）など５・６世紀のものも多少は出ているのですが、弥生に遡ってはわかりませんので、これが今後の課題といえば課題です。しかし、少なくとも西のものとは系譜が違うものが出ております。数は多くないけれども無視できないほどにはちらほらと出ていますし、増えつつあるということだろうと思います。

そんなところでよろしいでしょうか。

武末：渦巻形の装飾が付いた鉄剣は、弥生時代の終わり頃ですね。まだ金官伽耶ではなく狗邪韓国だと思います。

土生田：弥生時代のことですから、当然狗邪韓国です。失礼しました。

武末：若狭あたりから入ってきてもよろしいでしょうか。

土生田：なぜ若狭とおっしゃったかといいますと、5世紀になると若狭の地域は対外的なものがいっぱい出ますので、それをいわせようと思っておられるようですが、若狭は遠すぎますので、若狭かもしれませんが、私はもう少し東寄りのほうが素直ではないかと思います。しかし、先ほどいいましたように、証明できませんから何ともいえません。

武末：そうではなく、金海貝塚で出ている近江系土器が若狭も含めた範囲で考えられるので、そこからさらにルートをつなげないかということで申し上げたわけです。

それから馬形の帯鉤は古墳時代に入るのでしょうか。やはり弥生時代に収めてよろしいのでしょうか。

土生田：これは遺構がわかりません。型式分類でいいますと、それほど古いというものではありませんので、古墳に入るかもしれません。あれははっきりした遺構ではありません。ですから、採集品ですから明確に遺構に伴っておりませんので何とも申し上げられません。

それから、いま北陸のことをいいましたが、朝鮮半島はともかくとして、北陸は出雲や九州との交流もありますので、海を通した交流はずいぶんあります。その延長線上にあってもおかしくないという程度でございます。

武末：亀田先生、馬形帯鉤は忠清北道の清堂洞遺跡でもたくさん出ていまして、あれがちょうど三韓時代から古墳時代の始めだと思います。この馬形帯鉤もそのあたりの時期でよろしいでしょうか。

亀田：武末先生はおわかりになっていて質問されているのだと思いますが、馬形帯鉤は古く漁隠洞という現在の大邱（テグ）の東の永川地域で、紀元前後くらいのものが出ております。以前はこの資料があるものですから、日本の弥生時代頃のものだといわれていました。いま武末先生がおっしゃった清堂洞遺跡のものは、おもに国立中央博物館が25年ぐらい前に調査されて、時期的には3世紀を中心とする時期のものと考えられています。

さらにその後、各地で発掘調査が進むなかでいろいろなデータが出てきました。土生田先生の11ページの第5図のいちばん下のほうに清堂洞遺跡のものとともに10番、11番が「城洞里」とあります。このように調査が進んできまして、もう少し時期幅があることがわかってきまして、4世紀までは確実にあることがわかりました。さらに5世紀の前半まで下がるものも出てきまし

た。それで先ほどの岡山のものもおかしくないと考えられるようになりました。
　このように馬形帯鉤は、朝鮮半島では日本列島の弥生時代中期後半頃から5世紀くらいまではずっとあります。この長野の浅川端遺跡の馬形帯鉤がいつになるかよくわかりませんが、型式分類がここに示されており、それほど古くまではあげていません。
　ですから、ひとまず弥生時代から古墳時代の境頃でもおかしくはないのかなと思いますが、よくわかりません。

武末：大型で棒状の鉄斧は、長崎県壱岐市の原ノ辻遺跡で1本、福岡県春日市赤井手遺跡で7本ぐらい出ていますので、これは北部九州経由でいいと私は考えます。
　そこで土生田先生、確実な4世紀の東日本での渡来文物は、何かございますか。

土生田：なかなか追求の手を緩めてくれませんが、最近ではやはり長野や群馬、神奈川あたりに渡来系のものがあります。それが弥生なのか古墳なのか難しいところがあります。そういったものがいくつかちょこちょこと出ています。映像をご覧ください。
　これは上田原、長野のもので鉄鉾です。これについては高久先生が詳しいので、高久先生にお話をしてもらいましょう。

高久：これは長野県上田市の上田原遺跡第40土坑から出土した鉄矛です。周囲の周溝墓の時期からみて、弥生時代後期後半ぐらいのものではないかと考えられます。弥生時代後期の関東において、板状鉄斧はいくつか存在しますが、鉄矛はとても珍しいといえます。この鉄矛は朝鮮半島南部地域からの舶載品と推定され、弥生時代後期の舶載鉄器が内陸の長野に存在するという点が注目されます。

武末：この時期はこれぐらいにしておきますが、東日本でも古墳時代の前期に属する軟質の赤焼鉢などが出てきたらいいなと私も思っています。

土生田：この点については、かつて私が科研の代表であったときに、亀田先生がいらっしゃいまして、東北に至る各地域の軟質な赤焼きの土器をご覧になりましたので、是非亀田先生にご説明をいただきたいと思います。

亀田：15年ほど前だったでしょうか、東北まで連れていっていただきまして、朝鮮半島系の赤焼きの土器を見学させていただき、とても勉強になりました。ただ、あの時点でそれほど古いものはあまりなかったかと思います。
　次に5世紀のお話に入っていくことになるのかと思います。土生田先生がしきりにこの東北での話を5世紀後半頃とおっしゃっていますが、亀田は朝鮮半島との関わりはおもに5世紀前半頃からと考えてお話をしております。そして、その差が時間差なのか、別の意味を持つのか気になっておりますが、土生田先生たちがおっしゃっているこの「5世紀後半」というのは、少なく

とも近畿の編年観でいうと「5世紀中頃」までは上がるのではないかと、申し上げております。そして、最近ではこの「5世紀後半」は中頃を含む後半ぐらいで使われていると思います。

例えば、群馬県の剣崎長瀞遺跡の資料を拝見して、この遺跡には渡来人一世が来ていてもいいのではないかと思います。ただし、それ以東、以北に関しましては、一世が持ち込んだような、または一世が直接つくったような資料は、あまり出てきません。

ですから、個人的な感想としましては、西毛（群馬県の西部地域）ぐらいまでは第1次移住のようなかたちで渡来系の人が入っていると思いますが、それよりも東に関しては第2次的な移住のようなかたちで展開したのではないかと思っております。群馬よりも東側の朝鮮半島系の土器の多くは日本化したもの、つまり2世たちが関わっているのではないかというお話をその時点でしたことがあります。さらに「馬韓系などが多いですね」と言った記憶があります。

先ほどの土生田さんのお話には出ませんでしたが、長野県の大室古墳群で馬の土形（土馬）が出ていまして、その年代が5世紀の後半段階で、日本でも最古段階に入ります。このような土の人形はおもに律令祭祀に使われると考えられているのですが、このような古いものが少しずつ見つかり始めました。また実物の馬の骨も、長野県だけではなく、岩手県奥州市水沢区中半入遺跡で5世紀中頃の馬の骨が出土しています。これらに関わる遺物は渡来人二世くらいが関わっているのではないかと思っています。ちなみに考古学をされている方がおられますので申し上げておきますと、須恵器はTK216、中村編年でいいますとⅠの2段階のものです。考古学をされておられる方は亀田の5世紀中頃はいつ頃だと思われる方もおられるかもしれませんが、一応そういうころになります。

土生田：私、先ほどいい忘れたのですが、5世紀中葉から後半という時期に大きく展開する積石塚に象徴されるような渡来人の移配ですが、始まった時期ははっきりしませんが、はっきりしているのは北信が大きく飛躍するということです。そして、積石塚はほとんどありませんが南信も出てきます。そして西毛でも出てきますし、近江にも出現します。そのほかに甲斐国や奥三河のほうにもありますが、これはいつから始まるかははっきりしていません。こういった地域が伝統的にお互いに交流があるかというと、例えば信濃の北信と西毛は交流がありますが、全体として交流があったかといいますと必ずしもそうではありません。それが同時期に急に出てくるというのは、カッコ付きではありますが、畿内の王権の力を除いては考えられません。集中的に移配させたのだろうと思います。

ただ、先ほどいいましたが、在地における渡来人の扱いは、在地における政治構造の違いによって異なります。つまり、集中的にあちらこちらへと移配することはできたとしても、その地域に直接的に政治的な中に口出しをする、つまりコントロールするところまではとてもいかないという段階だと考えたほうがいいと思います。これは「7世紀後半における律令社会完成に至る長い道のりがいま切って落とされた」と、こういうふうにいえばわかりやすいのではないかと思います。

亀田：さて、このあたりから、私がおもにお話しさせていただきます。

今日は土生田先生から西日本の渡来人について１時間でしゃべるようにといわれまして、筑紫と吉備と畿内の渡来人について、特に筑紫に少しウエイトをかけてお話しさせていただきました。

その３つの地域を比較するお話はのちほどさせていただきたいと思いますが、武末先生が最初に西新町遺跡のお話をされました。武末先生、西新町遺跡は４世紀のいつ頃で終わるのでしょうか。

武末：４世紀の後半頃までで、末にはもうなくなっています。

亀田：そうしますと、４世紀の終わり頃からの朝鮮半島との関わりの波が大きくなってくるというときにはもうあまりないわけですね。

武末：そういう画期が１つあると思います。

亀田：そのあとはどうなるのでしょうか。武末先生が以前お書きになられた吉武遺跡群の位置付けについては福岡の方も注目されていますが、まだもう１つ整理ができていません。ただ、あそこは５世紀段階における北部九州最大の拠点になっていると思います。それも多様な地域と交流があるというのは非常に意味があると思います。そのあたりはどうでしょうか。

武末：吉武遺跡群が西新町遺跡に代わる対外交易の拠点になったと考えます。これは、金官加耶の王族が滅亡するのと連動した動きでしょう。なぜそうしたことをいうのか。金海地域に古墳時代前期以来の土師器系土器があることを申し上げましたが、そこには５世紀代の新しい土師器は入りません。５世紀の土師器は、もっと南海岸地帯を伝わって、全羅南道のほうまで延びていき、新たなルートで入っています。それだけ大きな構造変動があります。

そういうところで百済へのルートに切り替わっていくと考えますし、亀田先生は盤形の大きな平底の土器を、もっと南のほうで考えておられますが、私は百済の中枢部の土器でもいいのではないかと考えますので、交流の範囲も広がったといえます。

いままでの５世紀のイメージは、「巨大古墳の世紀」とされ、巨大古墳＝強力な王権とみなされがちですが、特に５世紀前半段階で本当に強大な王権があったのかは常々疑問に思っています。西暦390年頃に朝鮮半島南部にいた倭人系集団等も、おそらく高句麗の騎馬軍団に蹂躙され、蹴散らされて敗北しただろう。その敗北のあとに何をするのかといえば、５世紀は富国強兵の時代だと考えます。

ただ、そこには高句麗が攻めてくるかもしれないという恐怖心もあります。いまの北朝鮮でも巨大な銅像をつくっていますが、巨大古墳は例えばそうした巨大な銅像だったのではないか。銅像の大きさでいえば、アメリカなどの銅像に比べて北朝鮮がいちばん大きいでしょう。では、北朝鮮が世界でいちばん強大な国なのかといえば、そうではありません。むしろ、恐怖心の裏返しではないのか、それは巨大古墳も同様ではないのか。

そうした敗北を糧に、１つには富国でいろいろな開発をやる必要があったし、強兵については

武器武具の革新と馬具の広範な普及がそれにつながるでしょう。

これはこれから考えるべき課題ですが、4世紀末からに朝鮮半島にいた倭人の子孫たちが帰ってきた可能性もある。いわゆる「引揚者」です。そういう人たちが本当にいるのかいないのか、それを考古学の資料でどう実証するかはこれからの課題です。

もう1つ、「富国」とでは、U字形の鋤・鍬先ですが、これについて亀田先生はあまりお話しされませんでした。おそらく農耕具と考えておられるのでしょうが、私はむしろ土木開発具と考えます。つまり池を築いたり、溝を新たに掘って川の流れを変えたりするなど、地溝開発の大土木工事をやるときに使われた。老司古墳でそういったU字形の鉄鋤・鍬先が1点出ているといわれました。ところが、渡来人も埋葬された福岡県朝倉市の池の上・古寺墳墓群では、お墓自体は小さいのですが、同じ時期に合計5、6点出ています。そうすると、渡来人は地域開発集団として来たと考えますが、どうでしょうか。

亀田：まず、富国政策といいますのは、武末先生が考えておられるのは畿内の王権のほうでしょうか、北部九州のほうの在地首長でしょうか。

武末：近畿の王権はもちろんそうですが、各地の地域政権それぞれでもです。

亀田：岡山、播磨、畿内地域では5世紀前半段階に巨大なお墓ができます。特に播磨では川沿いに100メートルから150メートルの播磨の中でもトップクラスのものができます。しかし、そのあとは小さくなっていきます。吉備も5世紀前半に造山古墳があり、作山古墳があり、両宮山古墳が中頃くらいですが、そのあとは小さくなっていきます。畿内も5世紀後半になると小さくなっていくとはいわれておりますが、北部九州はそこまで大きいものはできません。ですから、そういうところからいえば、私が個人的に思っていますのは、渡来人の関係も含めて大和から吉備くらいまでの範囲は王権とかなり連動している部分があるけれども、北部九州はそこまで連動していないのではないかということです。

つまり吉備の関係者も朝鮮半島にいっていますし、九州もいっていると思いますが、やり方や関わり方が違うのではないかということです。そのときに上毛のグループもいっているようです。

ですから、やはり5世紀前半段階に、武末先生がおっしゃるように高句麗から攻め込まれるのではないかという危機感も含めてかもしれませんが、何か刺激があったのではないかと思います。そういう中で巨大なものを造ったのも事実だと思いますし、一方で各地の豪族層が渡来人を使いながら、受け入れながら、関わってもらいながらいろいろな革新が行われたと思います。鉄であり、馬であり、焼き物であったと思います。そして先ほど武末先生がおっしゃったU字形の鋤・鍬先もその通りだと思います。ただ先ほど例に挙げました老司古墳の場合はそのトップとして持っていて、池の上・古寺古墳群は実際に関わる人たちとして持っている可能性があると思います。ですから同じ物であっても、持っている人によって意味が違うと思っています。

いま、話がかなりごちゃごちゃになっているかもしれませんが、我々3人はある程度共通の

話をしていていながら、見方によって、とらえ方によって話し方が変わっているのかなと思います。そういう意味で話を戻していきますと、渡来人たちは渡来人たちの気持ちとしてどのように生きていくのか、そして王権や豪族たちとどのように関わるのかということが重要だったと思います。これについては武末先生が、最初に渡来人側の視点でといわれておられましたが、まさしくそう思います。

一方で私たちはどうしてもいままでの感覚、特に近畿圏でやっている人たちは近畿圏の発想で渡来人を見ます。つまり「どう使ったか」という発想です。しかし土生田さんの東日本の話になると、それが「どう入ってきたか」という発想になっています。ですから、立場によってぜんぜん違って見えると思います。ただし事実関係としていえることは、鉄器の生産であったり、馬を飼ったりという話になっていって、武末先生がおっしゃった水路の開発は基本的に田んぼの開発に通じていると思います。そういうものを含めて渡来人たちをうまく受け入れて、発達した地域が何カ所かあります。それらの地域で、具体的に渡来人をキーワードとしてとして、技術革新・開発などを見ていると思います。それが「交流」という話にもなっているのではないかと思っております。

ですから、3人とも基本的に5世紀には渡来人はそれなりにたくさん来て、いろいろなことをしたと考えているけれども、その入り方・動きに関してはいろいろあるだろうと考えていると思います。

土生田：割り込ませていただきます。

4世紀末・5世紀初頭の対高句麗戦の敗北によって変わったとお二人のお話の中でありましたが、私もそのように思っております。従来からいわれているように、そのころから急に馬具が出てきます。それから、武器でも長弓で盛矢具に収める時、矢鏃の先を上に向けていたのが、短弓で下に向けるようになりました。戦争のときに矢鏃がむき出しになっているのをつかむと怪我をするからです。だいたいこのようなものは相手を威嚇するためのものですから、やたら面がいっぱいで光を当てて相手をびっくりさせていたのですが（鎬が多くあらゆる面から太陽光を受けて反射させ光らせる矢鏃）、そういうようなことでは通用しなくなったということで、これは従来からいわれているとおりです。

私が武末先生に聞きたいのは、武末先生の代表的な論文の1つといっていいと思いますが、須恵器というのがありますし、あるいは古い土師器小型丸底土器というのがありますが、こういうものが日本からももちろんいきますし、人の往来のあるところは水のように一方方向にいくものではありませんので相互交流というのが必ずありますが、先ほどのお二人、あるいは私のほうでも反対の道筋のこともお話ししましたが、武末先生はかつてそういうものが朝鮮半島にいって向こうで陶質土器（日本で須恵器）となって在地化したのがまた戻ってくるというようなことをおっしゃいました。これはおもに5世紀のことではなかったかと思いましたが、なぜそれを隠していらっしゃるのかうかがいたいと思います。

武末：今回、私は前期の終わりまでだと、土生田先生からきついご命令をいただきましたので、

5世紀のことにはまったく触れておりません。私は土生田先生に非常に忠実なのです。

4世紀代の土師器の代表的な器種である小型丸底坩が加耶にいって、向こうで口頸部が大きく開く形態を保ったまま、5世紀にかけて陶質土器でもつくられるようになります。その陶質土器化した小型丸底坩が、5世紀になって今度は日本列島に入って来るのです。そういう形で相互交流があったと30年ほど前に書きました。さらに言えば、日本列島の5世紀の小型丸底坩は、口頸部が非常に小さくなります。一方5世紀に日本列島に入ってきた陶質土器の小型丸底坩はそれとは異なって、4世紀代の日本列島の小型丸底坩の形をそのまま保っています。こうした違いもあります。

ただ、先ほどもいいましたように、4世紀段階の交流対象やルートは、5世紀段階の交流対象やルートと違います。土生田先生は先ほど、どうして亀田先生は全羅道の前方後円墳に触れなかったのだとおっしゃいましたが、最近では全羅道でも特に全羅南道の南海岸沿いに、その前の時期である5世紀の古墳、ペノルリ3号墳や野幕古墳などをはじめとして、倭系の古墳や倭系の甲冑を持つ古墳が点々と出てきています。全羅道の地域で前方後円墳がつくられる下地を、これらの古墳がつくったと考えます。

しかも、それは単に経済的な交流だけではなく、そういった倭系の甲冑の副葬の仕方も、甲の中に冑を入れて倭の副葬の仕方を再現した例まであります。また、そういった倭系の甲冑が忠清北道のほうでも出て、最近ではソウル市の可楽洞2号墳という漢城百済の中心部でも出ています。また、5世紀から6世紀前半の須恵器も慶尚南道・全羅南道の南海岸地帯から京畿道に至る西海岸地帯沿いに点々と出ています。

軍事的な支援ということでは、倭が支配したとされる任那日本府はもちろん私もなかったと考えますが、それをはずしたところで、もう一度百済の王権と倭王権との軍事的関係を見直すべきだと考えますが、いかがでしょうか。

土生田：たぶんいまおっしゃった中には古墳なども入っているのだろうと思います。まったく知らないと思われると嫌ですから、知っているというところを一応いっておきますが、私がいいたかったのは、一方方向ではなく相互交流があり、その中にはいったんどちらかにいってまた変形して帰ってくるものがあるという、そういうところまで見通していったほうが実際の交流がわかるのではないかということです。それと全羅南道の前方後円墳は6世紀前半から中葉に築造されたものですが、その前史である5世紀後半には埴輪をはじめ、甲冑など倭系の副葬品が埋納された方墳（オギャリ古墳など）がいくつかあります。武末先生は6世紀になって突如前方後円墳が出現するのではなく、その前史にも注目する必要のあることを指摘されたわけです。その点では逆に全羅道から列島への文化伝播にも注目しなければなりません。すなわち半島の陶質土器が列島に伝播して須恵器になるのですが、4世紀末からしばらくは金海など朝鮮半島東南部のものが伝来します。しかしその後5世紀中葉頃から全羅道方面の陶質土器の系譜をひく須恵器に取ってかわります。つまり上述の方墳とも合わせると、相互方向の交流が列島と全羅道との間で5世紀中葉頃から強いことを窺うことができるようになります。こうした前史をふまえて半島の前方後円墳を理解する必要があると思うのです。

さて、6世紀に入れという圧力が向こうのほうからかかっておりますので、今度は6世紀に入ってきますが、その中に、今度は埴輪が日本からまさに朝鮮半島に行き、あちら風に変化してそれがまた日本に帰ってくるというのが、関東でも埼玉古墳群の中の山だったかと思いますが、そこにございます。埼玉古墳群の指導者の中に高久先生がいらっしゃいますので、これも高久先生から説明をしていただいたほうがいいと思います。

高久：中の山古墳というのは埼玉古墳群で最後の前方後円墳でありまして、7世紀初頭ぐらいに築造されたものです。そこから全羅道に見られる底に穴が開いた壺形の埴輪が出ております。

これは埼玉県内の末野窯で焼かれたものですが、半島と関連があるのではないかという考えがあります。時期的には下る資料ですが、注目すべき資料であると思います。

土生田：その一連の中に四ツ塚だったかと思いますが岡山もございます。岡山の資料について亀田先生から是非お話をいただきたいと思います。だいたいそういうものは他の朝鮮系の資料も伴出しているものが多いと思います。

亀田：四ツ塚といいますのは岡山県と鳥取県の境目のところにある古墳群でして、その13号墳からいまお話の壺形埴輪が出ています。そして、1号墳の石室は吉備の中でも古い段階のもので、鍛冶関係のものも出ております。

この古墳群を南から見ますと右、北側のほうに犬挟峠という山陰に抜けていく交通路がございまして、そこはいまでも重要な道です。この古墳群が位置する蒜山という場所（高原・盆地）ですが、馬を飼っていたのではないかという考えがありまして、13号墳からは馬形の埴輪も出ます。ですから、これらはおそらく関連するものだと思っております。

逆に土生田先生に6世紀代のお話をおうかがいしたいと思います。先ほど私は渡来人に関して5世紀の段階では王権や豪族たちが関与し、5世紀後半から6世紀前半の吉備の反乱、磐井の反乱などによる大和王権の地方制圧によって、屯倉を設置し、渡来人を動かすというような話をしました。そのあたりに関して関東地方とのからみも含めていかがでしょうか。

土生田：まず「反乱」という言葉が気に入りません。あれは畿内王権の侵略に対するやむを得ない抵抗というふうにとらえたほうが、歴史的には正しいのではないかと思います。吉備のことについては、妻を寝取られたことだけおっしゃいましたが、そのほかにも、なぜか省かれましたが、鶏を戦わせたり、女相撲をさせたりということが何度かあって、そういうやり取りの中であのようになっていったわけです。

あの時期、吉備だけではなく伊勢、播磨、河内の在地豪族あるいは伊勢もありますが、反乱ばかり起きています。しかしあれは反乱ではなく、先ほども申し上げたように支配体系が変わっていくことに対する抵抗だろうと思います。

6世紀については、武蔵国造の乱というものがすぐ出てきますが、いまだにあれが大きい影響力を持っておりまして、南武蔵の豪族がそれによってつぶれて、北武蔵（埼玉古墳群）が台頭し

てきたと昔からよくいわれていますが、それでは時代が合いません。南武蔵はもうすでに4世紀末、5世紀前半で途切れます。埼玉の場合は5世紀後半に台頭しますから、そのあいだ時期が空いています。むしろ埼玉の中の勢力争いなのか、あるいはもう少し西のほうとの関係なのかは、これはまたのちほど高久先生に聞けばいいのかもしれませんが、あれはそのままの形では使えません。

ただ、5世紀後半から、埼玉は特別見やすいわけですが首長墳造営地が固定化されていきます。しかし、それまでは各地域で首長墳というのが一代ごとに築造地を移動する場合が、長野もそうですが、いくつかあります。

ところが5世紀後半、6世紀前半、6世紀中葉など、いくつかの時点に集中しますが、代々首長墳築造地が固定化していくことになると思います。先ほど出ました宗像のほうもだいたいそういうふうになってくるわけですが、これがことごとく国造になったり、それに近い状態になってくるので、やはり5世紀後半というのは大きな存在だろうと思います。

いったん少し緩んで6世紀の後半にさらにこれがしっかりしてくるのではないかと思いますが、どうでしょうか。

亀田：それで、土生田先生、ご専門の群馬県の緑野屯倉の話をしていたければ、あの辺りの渡来人の話と結び付くのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

土生田：別に群馬県が専門ではありませんが、緑野屯倉の実態についての細かいことは私にはわかりません。困ったときの高久頼みというのがありますので、高久先生に説明してもらったほうがいいかもしれませんが、群馬県にはそれほど屯倉設置は多くありません。群馬といいますのは、5世紀初頭には210メートルという東日本では特別巨大なものをつくっています。それが太田天神山古墳といいます。それから、太田天神山と共にもう1つの古墳、伊勢崎市お富士山古墳では、おそらく近畿から派遣された工人がわざわざ王者の石棺と考えてよい長持形石棺をつくっていたりするものですから、軽視しがたいものがあります。

のちにはそういう伝統の中に親王任国といって、平安時代になるとあそこの国主は天皇の子供しかなれないという特別の地位が与えられる下地があったのではないかと思います。そういうところを基準にするのは、東国の中でも特殊なところですから、いかがなものと思うのですが、どうでしょうか。

亀田：それでは、多胡碑などがなぜ出てくるのかという話を、最後に土生田先生にまとめていただければと思います。

武末：もう1つ。土生田先生が火を付けられた全羅道の前方後円墳は、百済官僚説や在地首長説、倭人説などあります。土生田先生はすでにこれについて論文も書かれています。せっかく渡来人を議論しましたので、火を付けた以上は是非とも消していただきたいと思います。

亀田：それではこの２つの課題についてお話いただき、おしまいにしたいと思います。

土生田：左右の方は九州大学出身の連合隊なのです。なぜ、私がやられなければいけないのかよくわかりません。そして司会の方もそうです。３対１で有利・不利があります。

まず、多胡碑のことですが、多くの胡人、つまり外国人がいたところということです。外国人の居住は、おそらく甘楽郡からの伝統がありまして、やはり５世紀後半から中葉に遡ると思いますが、はっきりしたことはわかりません。しかし、少なくとも５世紀後半段階から小鍛治、鉄器生産の遺跡が最近ではこの富岡市丹生遺跡などで見つかったりしております。そういう伝統の中でたくさんの人が来たのであろうと思います。

群馬は特別なところだということを再度いっておきたいと思います。

次に前方後円墳のことですが、これはおもに倭系官僚説というのと在地首長説というのがあります。私は後者のほうにくみしているほうです。百済の官僚を見ておりますと、物部の○○というように、日本名と向こうの名前とが合わさった人が６世紀後半にたくさん出てまいります。その中で有名な人に日羅がいますが、そのお父さんがいまでいう熊本県八代方面の人で、向こうへいって現地の奥さんを娶って、その子どもが日羅です。ですから、いま風にいえばハーフです。そういう活躍がありますので、そういう人の墓だろうという説があります。ただしこれには欠点があって、倭系官僚が活躍するのは６世紀後半ですが、前方後円墳はだいたい６世紀前半ですから時代が合いません。ただしその前提となるような人がいた「だろう」というふうに想定すれば可能かもしれません。

そして、私が主張する在地首長説というのは、在地の首長だけれども、あのあと完全に百済に編入されます。あの辺りは日本の倭の五王が秦韓、慕韓などいろいろな国を捏造したというのですが、馬韓の変形で慕韓という、百済にまだ完全に併合されていない地域が残っていただろうと、実際に古墳の様子を見るとだいぶん違いますので、そういう地域の人が百済の迫りくる危機に対して身の危険を感じて、日本ともつながっているというふうに示したと私は考えています。しかし、これにも欠点があります。一代限りで終わっているのです。光州市の月桂洞１－２号墳を除くと全部一代しかありません。ただし、そのあとに完全に陵山里式という百済の中枢の石室になったりしますので、まさに時代背景としては適合します。あとは前代における馬韓の中心地ではなく、その周辺地域にあるということです。つまり百済からみて未だ十分に支配できていない南端の僻地になるのです。

自分の都合のいいところばかりをいうのではなく、悪いところもいわなければいけないと思いましたので、つまり、両方ともまだ決定的なことはいえないということです。そういうことでよろしいでしょうか。

高久：まだまだ語り尽くせない部分も残っているかと思いますが、時間も過ぎておりますので、最後に本センターの本学の荒木敏夫先生に総括をお願いしたいと思います。

荒木：時間があれば、いまの司会の高久先生も含めた３人の先生に会場の皆様からご意見をいた

だきたかったのですが、せっかくおいでいただきましたのにその時間が取れませんでした。大変申し訳ございません。

会を主催しているセンターの者で、日本の古代史をやっております関係で、意見ではなく、まず3人の先生に御礼を申し上げなければならないと思います。非常に貴重なお話だったと思います。会場にお見えになった皆さんは、聞いていていかがだったでしょうか。

武末先生のお話も含めて、今日は3世紀から8世紀に至る600年ぐらいのところ、つまり卑弥呼がいた、そしてその後倭の五王の時代になり、それこそ吉備の反乱などがあって8世紀にいたる歴史を、「渡来人」の問題から話をしていただきました。話の端々、そして先ほどの鼎談の中でも出てきましたが、日本の古代を考える上で「渡来人」をキーワードにして、かくもこんなに深く関わってくるのかということだけは、お聞きになられた方は、是非、頭に入れておいていただきたいと思います。

私は、文献史学ですので、正直申し上げて細かなところはついていけない部分もございます。しかし、聞いていて1冊の本になるような非常に重要なお話でございました。幸いなことに本センターの年報にかなりの部分が反映されると思います。皆様に差し上げる分ぐらいは刷っていますので、来年も是非いらしてください。

鼎談のところでもあまりにも専門的すぎて、おっしゃっているお話がどのへんのところに関わるかつかみにくかったところもあるのではないかと思いますが、要所要所で非常に重要なお話がございました。武末先生が最初に土生田先生に振られていましたが、東国への渡来人の道が九州・近畿を媒介しないルートなのかとの、提起がありました。土生田先生が一貫しておっしゃっていることは、「東国はいつも近畿を媒介して語らねばならないのかというと、そんなことはないだろう」ということです。そして具体的なものからほぼ確信に近いところまではきているわけです。それは非常に重要なポイントです。

大和朝廷・王権を介在させないで東国への渡来人の道を、どう説明するのか。それは、先ほど武末先生が強調されたように、そこのところを地域主体で考えていったときに、5世紀の王権が、どれほど強かったのか、という問題関心につながるものです。

我々はこの問題は渡来人に限らないと考えておりまして、王権・国家によって、列島内を遠距離移動させられている「蝦夷」の問題を取り上げました。九州で蝦夷系集落が発見されてもいるわけです。蝦夷も同じように移配させます。これは国家の政策です。そして渡来人の移動も権力がどのような時に介在して動くのか、その他いろいろな問題があります。そのようないろいろな問題はまだまだあるというところを、かくも豊富に具体的なものから問題提起をしてくださいました。

本当にありがとうございました。

高久：ありがとうございました。本日のシンポジウムの内容は、来年の3月に刊行予定の本センターの年報に掲載する予定ですので、ご期待いただければと思います。

では先生方、本日はありがとうございました。

【了】